

ニホンジカ捕獲の取組について

三陸中部森林管理署 業務グループ ○金田 直幸
業務グループ 米澤 晃司
総務グループ 門脇 希

1. はじめに

当署管内には、ニホンジカ（以下、「シカ」という。）が多く生息する五葉山を抱えており、近年、シカによる農林業被害が拡大しており、国有林においては、苗木等の食害・樹皮剥ぎなど多くの被害が発生している。

防除対策として、当署では、平成19年度から防鹿柵の設置や忌避剤を使用するなどの取組みを進めてきた。しかし、シカ个体数の減少が見られずに防鹿柵の見回り・修繕等に要する経費が年々増加してきているため、平成28年度より囲いワナによるシカ捕獲事業を開始し、森林被害の防止に努めてきた。

今年度の捕獲事業を実施するにあたって、平成28年度から実施したシカ捕獲事業について検証した結果、いくつかの課題が見えてきた。

①シカは警戒心が強く、囲いワナ周辺には出没するがワナ内に入らない。

→囲いワナ設置後、すぐに誘引餌による誘引を開始したため、シカが警戒したことが原因と考え、約1ヶ月間、放置期間を設置。

②誘引餌（ヘイキューブ）の採食が確認できない。

→ワナ周辺にササなどの餌となるものが多く植生していることが原因と考え、ヘイキューブに代わる餌と給餌時期を検討。

本発表では上記の課題を検証して、今年度取組んだ釜石市内の国有林での捕獲事業について報告する。

2. 捕獲場所の選定

捕獲場所の選定にあたっては、次の条件を基に選定した。

①シカの見撃情報が多い場所、ワナの設置や捕獲後の処理作業が容易な場所

②降雪時でも捕獲が可能な場所

→五葉山周辺や三陸海岸地域

③鳥獣被害対策協議会による各自治体等からの意見、地元猟友会からの生息場所の情報提供

④当署で設置したセンサーカメラ調査での調査結果を活用

以上の条件を基に、夏～秋は釜石市内の国有林を、冬期間は



大船渡市内の国有林を選定した。（図1参照）

図1

表1、2は、選定場所に設置したセンサーカメラの調査結果である。表のとおり、高密度で生息していることが確認できた。

特に、表1：釜石市内の国有林では、集落から距離があり人が立ち入らないためか、夜間のみでなく、日中の出没も多く確認された。

センサーカメラ調査の結果①		
期間：平成30年7月4日～8月4日（1ヶ月）		
場所：釜石市橋野町橋野第一国有林369, 371林班内		
設置箇所①：撮影頭数	62 頭	密度 2.00 頭/日
設置箇所②：撮影頭数	102 頭	密度 3.29 頭/日
設置箇所③：撮影頭数	97 頭	密度 3.13 頭/日
設置箇所④：撮影頭数	108 頭	密度 3.48 頭/日
全箇所平均密度：2.98頭/日		

表1

センサーカメラ調査の結果②		
期間：平成30年5月25日～6月14日（3週間）		
場所：岩手県大船渡市赤坂西風山国有林22林班内		
設置箇所①：撮影頭数	14 頭	密度 0.67 頭/日
設置箇所②：撮影頭数	30 頭	密度 1.43 頭/日
全箇所平均密度：1.05頭/日		

表2

3. 捕獲方法の検討

捕獲方法の検討にあたっては、「囲いワナ」と「くくりワナ」を表3のとおり比較検討し、特に、「囲いワナは天井部が開いているためツキノワグマが掛かっても逃げられる」といった、錯誤捕獲防止の面に重点を置いて検討を行った結果、釜石市内の事業では囲いワナを使用することにした。

囲いワナ	検討項目	くくりワナ
有	当署での使用実績	無
少	クマの錯誤捕獲	多
低	捕獲確率	高
まとめて捕獲可能（中型・大型）	1回あたりの捕獲数	1頭ずつ捕獲
少	ワナを設置できる場所	多

表3

4. 捕獲事業の概要

(1) 囲いワナの設置場所と種類
図2の①～④のとおり、笛吹林道沿いの4箇所に設置した。

- ①小型囲いワナ（小鹿用）
…横0.75×奥1.60×高1.30m
- ②小型囲いワナ（大鹿用）
…横1.00×奥2.00×高1.55m
- ③中型囲いワナ（サークルD）
…横5.00×奥5.00×高2.00m
- ④中型囲いワナ（簡易）
…横3.80×奥3.80×高2.00m

※仕掛けについて

- ①②④…ワイヤーにシカが触れるとゲートが降りる仕掛け
- ③…自動捕獲システム（赤外線センサーでシカを感知し、自動で扉が降りる仕掛け）

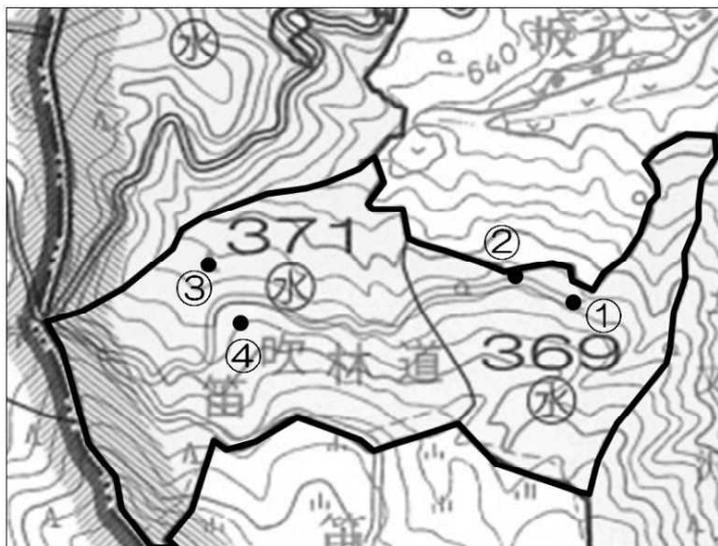


図2

(2) センサーカメラによる調査

囲いワナ設置後、シカの動向を確認するため、センサーカメラによる調査を行った。

①の箇所では、ワナ設置後1週間はワナを警戒して1頭のみ確認だったが、4週目に誘引餌を給餌した結果、大幅に増加し、107頭の出没が確認できた。(図3参照)

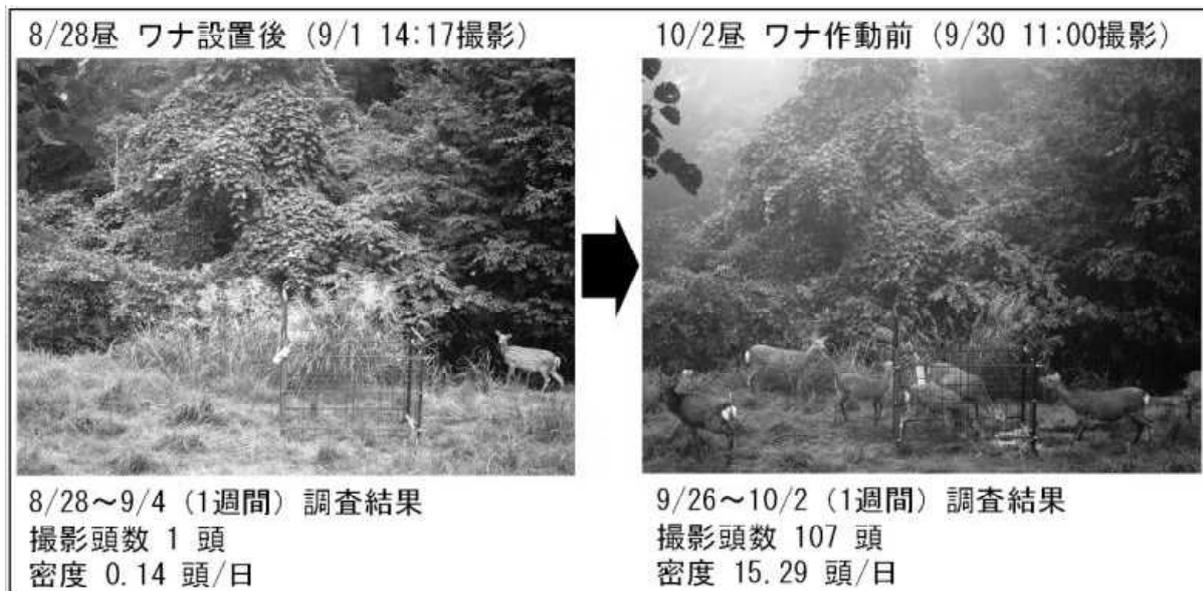


図3

②の箇所でも、ワナ設置後1週間は8頭の確認だったが、4週目に誘引餌を給餌した結果、大幅に増加し、84頭の出没が確認できた。(図4参照)

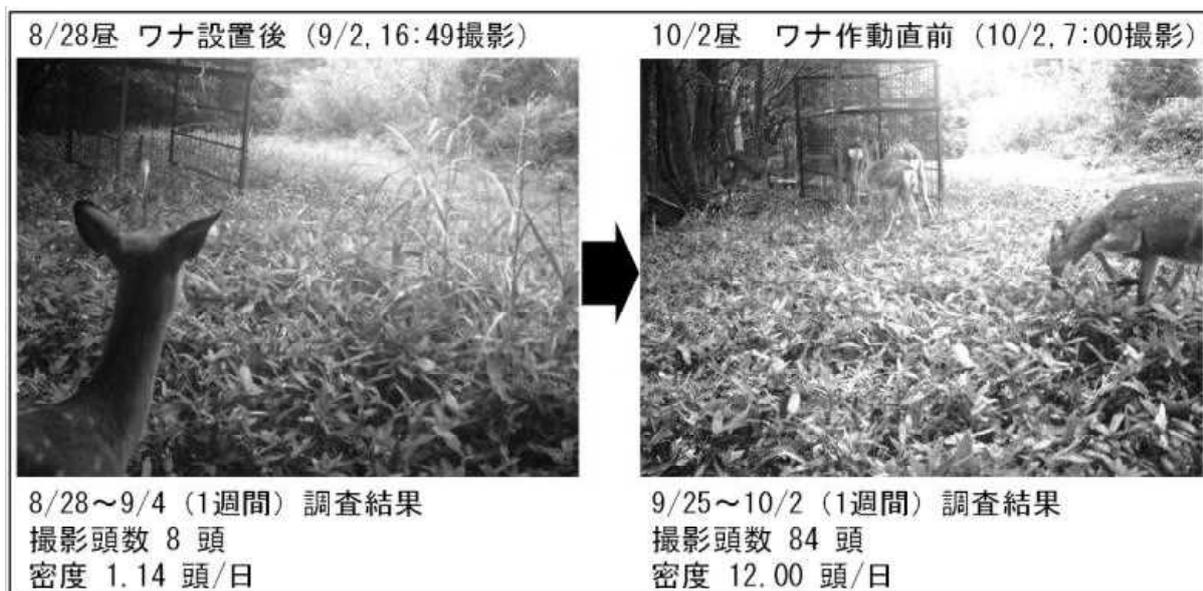


図4

その後、シカの出没数が増え、ワナ内に入るのが確認できたことから、捕獲を開始した。なお、③、④の箇所については、ワナ設置後の出没がほぼ見られなくなったことから、省略とする。

(3) 誘引餌の検討

ヘイキューブに代わる誘引餌について、地元猟友会の意見を参考に検討を行った。

(表4参照)

ツキノワグマの錯誤捕獲防止に重点を置いて検討を行った結果、リンゴはクマを誘引する可能性があることから使用せず、従来のヘイキューブと鉾塩の他に、大根の葉を使用することにした。

検討した誘引餌	可否	理由
ヘイキューブ	○	一般的に利用されており、過去の捕獲事業で使用
鉾塩	○	過去の捕獲事業で使用
ニセアカシアの葉	×	シカが好むが、捕獲事業地周辺には植生しておらず、食べ慣れていない
リンゴ	×	シカが好むが、ツキノワグマも好むのでクマを誘引する可能性がある
大根の葉	○	シカが好む、クマを誘引する可能性が少ない

表4

(4) 誘引餌の採食状況

一般的に使用されるヘイキューブと鉾塩を使用し、しばらく様子を見ることにした。

図5の左側が誘引餌設置時で、右側が1週間後の状況である。シカがワナ内部で鉾塩を舐めているのは確認できたが、ヘイキューブの採食は確認できなかった。

さらに1週間様子を見たところ、同様に、鉾塩を舐めているのは確認できたが、ヘイキューブの採食は確認できなかった。(図6左側)

このことから、ササなどの餌となるものが繁茂している時期はヘイキューブはあまり効果が無いことが確認できた。

捕獲期間後半になると、シカの出没が減ってきたことから、新たに大根の葉を誘引餌として追加したところ、翌日にはシカが採食した痕跡が確認できた。しばらく大根の葉を給餌したところ、採食状況が良く、有効であることが確認できた。(図6右側)

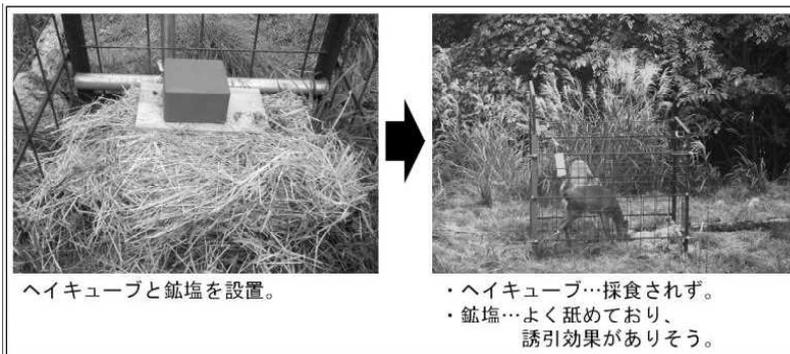


図5

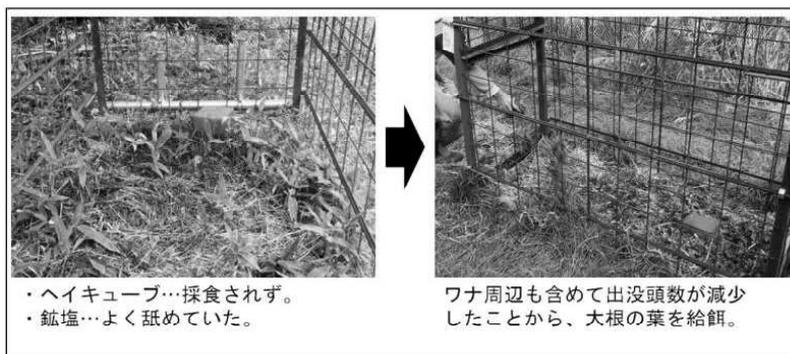


図6

5. 結果及び考察

(1) 脱走対策

大根の葉を投入した次の日の見回り時、入口の扉は降りていたが、中には何もいない状況であった。ワナの上部に土の跡・体毛が付着していたことから、シカが天井部から脱走

したと推測した。その後、センサーカメラにてクマの出没は確認出来なかったことから、クマの錯誤捕獲の危険性は少ないと考え、上部からの脱走対策として、ワナ上部を簡易的に覆う防止対策をとった。

(図7参照)

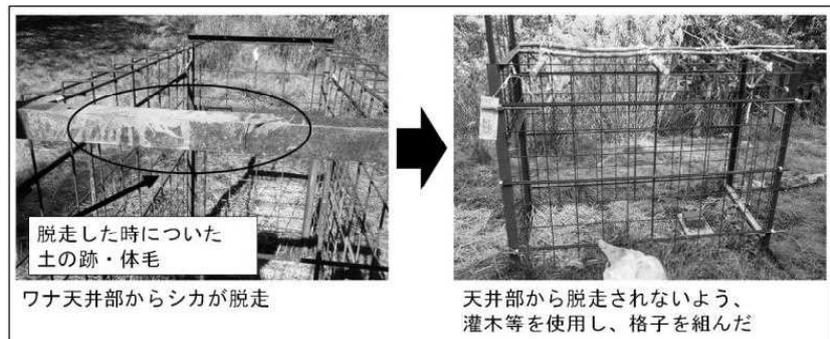


図7

(2) 捕獲事業の結果

今回の捕獲期間では、仕掛けは作動したものの、天井部から脱走されたことが何度かあったため、小型囲いワナ（大鹿用）で捕獲した1頭（メス、実測20kg）のみとなった。

(図8参照)

捕獲した個体は電殺器で止刺しを行い、焼却場にて焼却処分を行った。



図8

(3) 考察

- ・シカの警戒心を薄くするため、事前に囲いワナを設置して慣れさせる必要がある。
- ・鉋塩は、誘引効果が大きく、定期的な給餌の必要がないため、誘引期間中は警戒心を解くためにかなり有効と考える。
- ・新しい誘引餌として使用した「大根の葉」については、給餌直後から採食が確認できたことから、今後も誘引餌として有効と考える。

6. 今後の課題

- ・中型囲いワナは、ワナ自体が大きいためシカが警戒したことから、警戒心を解くために放置期間を長くするなど更なる工夫が必要である。
- ・シカが自動捕獲システムの赤外線を感知していると思われることから、捕獲期間中は電源を切らないようにする必要がある。
- ・小型囲いワナは、シカが天井部から脱走することから、ワナ上部に”返し”を設置するなどの対策や、入口の扉を開けられないようにする”ストッパー”を付けるなどの対策も必要であると考えられる。